新着資料ミニ展示「すてきなオサムシ」 開催記念フロアトーク

「歩く宝石」オサムシの魅力を語る

松本堅一 *

オサムシってどんな虫？

オサムシとは鞘翅目オサムシ科オサムシ亜科に属する昆虫です。オサムシ亜科はカタビロオサムシ亜族・オサムシ亜族・セダカオサムシ族に分かれていて、日本（北海道）にはカタビロオサムシ亜族４種（４種）、オサムシ亜族39種（12種）、セダカオサムシ族１種（１種）が分布しているとされています。鞘翅と呼ばれる背部が輝いている種が多く「歩く宝石」などと呼ばれることもありますが、黒く地味な種も多く生息しています。

特にオサムシ亜族・セダカオサムシ族の各種は後翅が退化していて飛ぶことが出来ません。夜陰にまぎれて地面を徘徊し、昆虫の幼虫、ミミズ、カタツムリを食べる肉食性の昆虫です。このため、各地域で分化し多くの亜種に分類されています。

私達の住む北海道と本州以南の共通種は、６種しかなく残りの６種は北海道の特産種です。

オサムシの調査でわかること。

オサムシの分布を調べることは自分の住む地域を理解することです。私が最初に調査に取り組んだ多摩段丘は「関東ローム層」と呼ばれる火山灰起源の土壌に覆われていました。多くのオサムシマニアが興味を示さない普通種しか分布していませんでした。しかし、全域を調査することによって、オサムシの分布が段丘面ごとに相違することを発見できたのです。そして断層と何らかのかかわりがあることを見つけたのです。私は関東平野全域のさらに全国の段丘を調査し、地域の区分と関連を調べようという構想を持ちました。しかし、道を少し踏み外して大学を中退し、郵便局員として33年間働き、結婚や病気を患い挫折しました。

2007年９月弟子屈に移住しました。家族のトラブルからの逃避とどうしても採集できなかった北海道産オサムシ数種の採集が目的でした。甲斐あって日本産のカタビロオサムシ亜族３種、オサムシ亜族37種、セダカオサムシ族１種を採集できました。

北海道で興味を持ったのはセスジアカガネオサムシの分布でした。海岸付近の湿地に分布するとされているこの種が、十勝利別川の上流部の陸別町の一部に分布していたことでした。私の住む釧路川上流の弟子屈町にも分布しているのでは？と考えました。自動車を持っていない私は、五十石駅周辺から摩周駅周辺までは釧網線を使って徒歩で、さらに摩周駅から屈斜路湖までは自転車を使って、釧路川両岸のキタヨシの生える湿地を調査し、連続的にこの種が分布していることを確認しました。同時にほぼ並行して海岸に生えるとされるシカギクとコシカギクが分布しているのを確認しました。この事実は１万２千年前に終わった最終氷期後の最温暖期６千年前の縄文海進の置き土産で、陸別町のセスジアカガネオサムシもその結果であると推測しました。

昆虫地理学の彼方へ…

オサムシの飛ぶことが出来ず、地域に密着した固有の亜種に分化する習性は、過去の地史を表現していて、この分布を調べることは、断層帯や過去の気候変動を解明することに役立つ重要な昆虫です。

＊日本甲虫学会

興味をもたれた方が、お住まいのそれぞれの地域で調査すれば、自分の住んでいる場所の地史を解明するのに役立つのではないかと思います。それを集めれば、根釧地方全体の地史のあらましを知ることが出来るのではないでしょうか？

本稿は2020（令和2）年1月11日に開催されたフロアトークの要旨を取りまとめたものです。

松本堅一氏よりオサムシ標本コレクション寄贈される

土屋慶丞 *

松本堅一氏について

釧路市立博物館にオサムシ標本コレクションを寄贈された松本氏は東京都のご出身で、横浜国立大学在学中にオサムシの研究をはじめられました。その後の経歴や研究については松本氏自身が述べられていますので、ここでは寄贈に至る顛末についてご紹介します。

寄贈の打診を受けて

松本氏から最初に寄贈を打診されたのは、2018（平成30）年６月のことです。電話やメールで何度かやり取りした後、９月にご自宅にうかがい実物を拝見しました。標本は１つ１つ丁寧に形を整えられ、ラベルと一緒に標本箱や整理戸棚に保管されていました。その数は日本産オサムシのほぼ全種にあたる41種、約１万3,400頭。標本目録やデータベースも作成されており、大変優れたコレクションであることが一目で分かりました。

収蔵庫の確保

博物館では昆虫標本をはじめ資料の多くを住民や研究者からの「寄贈」という形で集め、地域の財産として保管しています。そのために必要となるのが資料を保管する「収蔵庫」です。

しかし当館の収蔵庫は飽和状態に近く、寄贈していただいても保管場所がありません。館内でも話し合った結果「北海道産の標本（14種・約１万頭）のみ寄贈していただく」「収蔵庫を整理して保管場所を確保してから受入る」ことになり、松本氏にもご了解いただいて収蔵庫の整理をすすめました。受入れが実現したのは2019（令和元）年10月、整理に１年以上かかったことになります。

なお、道外産標本は岡山県の倉敷市立自然史博物館に寄贈されました。受入れにご尽力された大野理恵氏（全国的な自然史系標本セーフティーネット事務局）、奥島雄一氏（倉敷市立自然史博物館）に厚く御礼申し上げます。

コレクションを活用するために

博物館に寄贈・保管された標本は他の研究の材料になったり、展示などを通して研究成果を広く発信するなど、様々な形で利用されます。

今回寄贈された標本は整理戸棚に収納されていました**ー写真１ー**。虫やカビの被害を避けるため、現在「ドイツ箱」とよばれる密閉性の高い標本箱に入替えをすすめているところです。新着資料ミニ展示「すてきなオサムシ」（12/21～３/８）では、入替えが完成した２箱分をお披露目しました**ー写真２ー**。今後２年ほどかけてすべての標本を入替え、大規模な企画展の開催を計画しています。

写真１

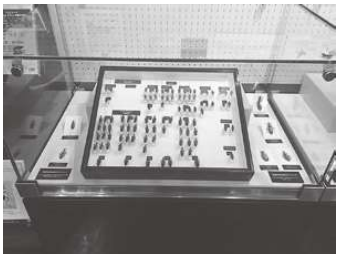

写真２

＊釧路市立博物館